

棚田学会通信

第29号 2009年11月17日
 発行/棚田学会
 〒184-8577 東京都小金井市本町6-5-3
 (ふるさときゃらばん内)
 TEL:042-381-6721 FAX:042-383-8614



島根県吉賀町「大井谷の棚田」と石見神楽 (提供: 吉賀町役場)

◆巻頭言	2
島根県吉賀町柿木村白谷の「大井谷の棚田」	島根県吉賀町町長 中谷 勝
◆会員通信	3
棚田からのメッセージ	棚田むすびの会会長 扇田久美子
都市近郊の里山保全に参加して	倉沢里山を愛する会会長 峰岸 純夫
中山間地で暮らすことの意義	衆議院議員 長島 忠美 (旧山古志村村長)
「東北アジア棚田シンポジウム&写真展」参加報告	東京都府中市 今井 英輔
「第15回全国棚田(千枚田)サミット参加報告」	神奈川県横浜市 萩野 宏樹
◆日本の棚田百選紹介	8
富山県氷見市の「長坂(ながさか)」	富山県氷見市長坂区長 木和田 勝
◆書籍紹介	9
森田 敏隆著「日本名景—棚田」	千葉県千葉市 森 公夫

事務局ニュース

- 談話会のご案内 10周年特別企画「棚田が語る歴史と未来」
- 棚田学会誌 11号への原稿募集他 ● 棚田学会費の公募並びに基金募集について
- 平成21年度棚田学会活動計画及び収支予算 編集後記

巻頭言

島根県吉賀町柿木村白谷の 「大井谷の棚田」

島根県吉賀町町長 中谷 勝

吉賀町よしかちょうは島根県の南西部に位置し、山口県と広島県と接する県境にある町です。平成 17 年 10 月 1 日に旧柿木村と旧六日市町が対等合併して誕生しました。総面積は 336.29km² で、林野率は 92.2%、町の中心部を東西に一級河川高津川が貫流しており、水と緑に囲まれた農山村地域です。

一級河川高津川は 2006 年と 2007 年と 2 年連続で国土交通省の水質調査で日本一となり、多くの命を育てている高津川を流域住民の誇りとして喜んでいるところ です。

吉賀町の農業は、旧六日市地域では、高津川の流域に広がる比較的平坦な耕地に、水稻を中心とした農業施策が展開されています。

旧柿木村では、耕地が少なく、米を中心に自然条件を生かした椎茸・わさび、そして、約 30 年前から有機農業に取り組んでおり、自給的生活の中で少量多品目の野菜を栽培する複合経営が行われています。

農業経営の状況は、総農家数及び農業人口も減少しており、農業産出額も減少傾向にあります。農地が少ないため、小規模零細経営の農家が多く、60 歳以上の農業経営が 70% を超え、後継者がいる世帯は 4 割にも満たないという状況です。過疎化・高齢化が同時進行し、その結果として農村の地域活力は低下しています。

さらに、耕作放棄地が増加し、優良農地の荒廃や里山景観の喪失という、環境保全への影響も懸念されています。

農業の再建に向けて、吉賀町は今後、環境にやさしい有機農業を町全体に広め、豊かな地域資源を活かした都市交流人口の拡大、そして集落を中心とした地域の自立と担い手の育成を推進し、経済性と環境、安全、安心がかみ合った農林畜産業の振興が必要となっています。

大井谷の棚田は、今から 600 年ほど前に、大内氏(山口)に仕えていた三浦一族が開拓したといわれており、室町時代から江戸時代にかけて築かれた石積みの棚田が現在約 600 枚残っています。その石積みの田の美しさから「日本の棚田百選」にも選定されています。

大井谷の水田面積は、江戸初期には既に 8ha が耕作されており、その後江戸後期には 12ha、最大時には 17ha で約 1,000 枚が耕作されていました。しかし、減反政策によって、谷あいや山裾などの条件の良くない田んぼにはスギやヒノキ等の針葉樹が植林され、現在の面積は約 8ha に減少しています。高齢化、後継者不足、米価の低迷、転作等により稲の作付けは 6ha まで落ち込んでいます。現在、大井谷には戸数 20 戸、人口 60 人弱が暮らしており、昔と変わることなく棚田は生産現場として、日々生産活動が営まれています。

大井谷の田んぼは 1 枚 1 枚が小さく、また形も一定でない上に、段差があるため田んぼから田んぼへの移動も容易でなく、機械化が難しく作業効率の点からみれば良い田んぼとは言えません。大井谷では以前から平場と同様に基盤整備を望む声上がり、何度も話し合いを重ねてきました。島根県の支援により基盤整備のシミュレーションを行ったところ、田んぼの面積が半減することや事業費が高額になることなどから基盤整備を断念することになりました。このままでは棚田は荒廃し、集落は崩壊していくのではないかの懸念が地元住民の中で生じはじめていました。

そんな中、当時、全国的にも棚田が注目を集め始めており、単に生産の場としての機能だけでなく、保水などの多面的機能を持ち合わせているということで見直されていました。地元住民の中では棚田の保全と地域づくりを考えていこうというムードが高まり、学習会や先進地視察を行い、今後の集落像を模索していきました。その結果、平成 10 年 4 月、集落をみんなで守ろうと、地元住民 21 戸(現在 20 戸)すべてが参加して「たすけ助はんどうの会」を結成し、棚田を活かした地域づくりへの取り組みが始まりました。

「助はんどうの会」の発足と併せて、県や専門家の支援により大井谷地域振興検討会を発足し、棚田の歴史的検証、都市交流、棚田整備、農地保全等多面的な検討を行い、大井谷地域振興計画を策定しました。特に地元から要望の多かった基盤整備に関しては、平成 10 年より国の棚田地域等緊急保全対策事業を導入し、耕作道、水路、耐久性畦畔、石垣の補修の整備を行い、また、都市交流を推進するために農作業準備施設、駐車場、展望公園の整備も行いました。

大井谷では、600 年前に先祖が築いた棚田を「自分の代で荒らしてはならぬ」という思いで耕し続け、

次の世代に受け継ぐために棚田保全に努めています。また平成10年から始まった棚田まつりや棚田オーナー制度などの「助はんどうの会」が行う様々な取り組みは、都市住民との交流等を通じて、大井谷の美しさや棚田のすばらしさを改めて実感する等、棚田の歴史や文化的価値、景観的価値を再評価するようになりました。地域を見直すことで地元住民の意識が少しずつ変化し、棚田は自分たち地域の宝物だという気持ちに変わってきたことが集落の活性化・棚田保全へとつながっていきました。

特に、オーナー制度を導入したことは大きな影響を及ぼしています。今まで一人で行っていた棚田での作業もオーナーと一緒に交流しながら行うことにより、農業に対する意欲や地域に対する誇りと愛着、地域の連帯感が生まれてきました。さらに、棚田米として独自の栽培基準を設けて有利販売していることは農家の所得向上にもつながっており、棚田保全だけでなく経済効果にも及んでいることは大きな成果であり、集落の活性化の大きなポイントの1つになっています。

これから集落が直面する最大の課題は、今まで集落を支えてきた世代が「支えられる」立場へと大きく移行するという状況です。現在、「助はんどうの会」として取り組みを開始して11年が経過しましたが、高齢化は進行し、オーナー制度等の取り組みだけでは棚田を保全することが困難になってきています。精神面だけでなく、体力的に支援できるような体制づくりを進め、集落営農組織による共同作業や機械の共同化、さらに消費者による農作業支援ができないか等について検討を重ねているところです。また、農業や棚田に対して理解し協力してもらうための都市住民との交流は今後も引き続き取り組む予定です。

中山間地農業の存続が懸念されている今日、大井谷地区のように条件が不利とされている地域でもその特性を生かした農業を確立することで集落が守られ、そこに暮らす人々が生き活きとしているのではないだろうかと思えます。そうした意味では、大井谷地区が吉賀町農業の、そして中山間地農業の牽引車となるように、引き続き棚田保全を推進していきたいと考えています。



会員通信

「棚田からのメッセージ」

棚田むすびの会会長 扇田 久美子

家は坂の途中にあった。駅から続く急な坂道を上りきった所にある小さな集落。家の周りには田んぼが広がり、夜はカエルの鳴き声の子守唄に眠った。家から学校まで続く道は駅からの坂を更に上る急な坂道だった。小学校と中学校の間にある溜池の下に広がる田んぼの畦道を通りながら帰宅するのが好きだった。いま思い起こせば、あのあたりも棚田だった。あまりにも生活と密着し、そこに当たり前にあったから、逆に気にしていなかった。誰も棚田とは呼んでいなかった。畦で花を摘み、虫を追いかけて、大好きだった木を見ながら学校から帰っていた。小学校に通っている頃、大阪外環状線が通ることになり、大規模な工事が坂の途中で行われた。その頃から新興住宅が増え、チェーンの店舗が並び、田んぼや畑はどんどん姿を消していった。

わたしもいつしかその地を離れ都会で暮らすようになった。再び棚田と呼ばれたのは2008年3月。玄米と野菜を使った料理をお出しする仕事をしていたので、自分で米や野菜を作りたいと思っていた。ちょうどその頃、知り合いから一緒に畑をやらないかと声をかけていただいた。奈良県生駒市西畑地区の棚田の休耕田だった。通ううちに棚田地域が抱えている問題を目の当たりにすることに。高齢化、後継者不足、たとえ子供がいても農家を継がせたくない、専業農家では生活がやっていけない現実など。そして、西畑地区の棚田では第二阪奈道路が開通したために、水源が涸れてしまい荒廃した田が多くあった。

より便利に、より豊かになっていく社会の裏で生じている皺寄せ。何が本当に便利なのだろうか、豊かとはどういうことなのか。

お世話になっている農家さんでも、本格的なお米作りは今年でもう最後だと去年告げられた。足が悪くなってしまったお母さんは田んぼにはもう入れない、息子はいるがとても専業ではやっていけない。抱えきれないジレンマに悩み、どうすればいいかわからなくなった。

わたしに何ができるだろう。きっと何も出来ないかもしれない。けれど何もしないで後悔するより動いたほうがいい。気付いたらもう走り出していた。

3年前に父を亡くしてから胸に穴が空いたままで、何かずっと物足りない気持ちでした。けれど棚田を通じてたくさんの人と出会うことで、自分の進む道が少しずつ見えてきた。

そして、見つけた。父からのメッセージを。父方の姓「扇田」とは「棚田」と知り、自らの名前に託されていた暗号が解けた。

扇なす
田の姿こそ
久しけれ
美しきえな
子をむすびつつ

扇なす田とは扇状地にある田んぼ、すなわち棚田のこと。それは悠久の昔より命を産み、育んできた大地のえな（子宮）。美しいえなからは美しい子が産（む）すばれる。この営みを守り繋げていくことこそが自らの天命、棚田を久しく美しくする子。

そこからは早かった。2009年2月「棚田むすびの会」設立。毎月5回は棚田に出かけ、会員数は100人を超え、現在に至る。

そこに棚田があること。

そこに棚田があったこと。

そのことを伝えていきたい。

わたしの『棚田を巡る旅』はまだ始まったばかり。そして、それは終わることはない、永遠に続く魂の旅なのでしょう。

▼棚田むすびの会のホームページアドレス

<http://tanamusu.earthblog.jp/>



2009年5月滋賀県大津市「仰木の棚田」で田植え

都市近郊の里山保全に参加して

倉沢里山を愛する会会長 峰岸 純夫

地球温暖化抑止の一方法として、都市近郊に残された里山保全の重要性が主張されて久しい。平成21

年7月18日（土）、東京・日本橋三越で開催された棚田学会シンポジウムは「里山と棚田を守る」をテーマとして、里山問題にも視野を広げた。シンポジウムの質疑応答では、わが「倉沢里山を愛する会」の発足の経緯と、私自身の里山ボランティア体験を報告した。ここでは、その内容をかいつまんで記したい。都市近郊の里山の保全には現実的に多くの困難が伴う。里山を所有している農家では、かつてはその里山の果樹や山菜が食料源であり、樹木や落ち葉が台所の燃料や田畑への肥料となっていた。しかし、その時代は終わりを告げ、加えて農業自体が後継者難で存続の危機に陥っている。さらに、次世代への相続に際しては、まず不要な里山を開発業者に売却して高額な相続税支払いを乗り切るという方法が一般化しており、里山の減少が著しいが、憂うべき事態と思う。

私が住んでいるところは、新宿から京王線で約30分、多摩川を越え、聖蹟桜ヶ丘駅を越えた進行方向左側に連なる丘陵の南側にある日野市百草の南百草住宅地である。30年前に多摩ニュータウン開発の余波を受けて広大な里山が一举に宅地開発されて住宅地になったところである。

この住宅地に隣接して数軒の農家が存在している百草倉沢地区がある。そのうちの大きな農家「石坂家」で10年前に、農家を継ぐ長男と非農家の弟姉妹たちとの相続問題が持ち上がった。この時、非農家相続人の娘とその夫（田村家）は、里山保全の重要性の認識から、他の相続人たちを苦勞の末に説き伏せ、畑を借りて菜園を耕作していた地域住民を中心に、この里山の保全のための署名活動を開始した。そして、日野市や都・国税庁と粘り強く交渉し、里山の一部を市に売却、一部を市に寄付、一部を国へ物納（後日、市が買い取る）という方法で、2ha余の里山の公有地化を実現することができた。そのオブリゲーションとして、田村夫妻および住民は「倉沢里山を愛する会」を組織し、「パートナーシップ協定」を日野市と結んで、里山の保全活動を行うことになった。日野市は、会に里山の保全・管理を委託し、会の手には負えない大木の伐採などを協力してやること等を協定に謳っている。私も役員（会長）として、月に1～2回程度の保全活動（下草刈り、落ち葉掃き、枯れ枝の伐採、希少植物などの保護）に参加して、自然の中でよい汗をかいている。午前中に活動が終り、会員が調理した料理にみんなで舌鼓を打つのも楽しみの一つで、地域のコミュニケーションの形成に役立っている。会員数は200人ほど、作業日には、毎回50人前後が参加している。この会の特徴として、管理地内に畑があることである。この畑を会員の希

望者に分割耕作してもらっている。畑には落ち葉を集めて作った堆肥を入れるなど、循環型農業を図っている。

この10年間に、この倉沢方式が農家相続に次々と適用されて、会の関与する里山は当初の倍近くになっている。また、隣接の多摩市の方にも展開されている。定年を終えた60代の方々を中心に、社会貢献と健康と実益（農産物の収穫）兼ねて、生き生きと楽しく活動する姿は実にすがすがしいものがある。



大木の伐採

中山間地で暮らすことの意義

衆議院議員 長島 忠美 (旧山古志村村長)

棚田学会の皆様には中越大震災以来、大変お世話になりました。あらためて、心より感謝申し上げます。

あの大地震から5年。おかげさまで災害からの復旧作業もほとんど完了し、山古志の人々も、地震前と変わらぬ平穏な暮らしを取り戻しつつあります。地震当時、お見舞いや激励に来てくださった方々から、「あの美しかった棚田の景観は取り戻せるのでしょうか。あのふる里は復興できるのでしょうか」と、よく訊ねられました。

私は当時、こう答えたのを憶えています。「地震前と全く同じ景観を取り戻すことはできないと思います。でも、私たちが中山間地の暮らしを取り戻すことができたら、農村の機能も戻ると思います。だから、その農村機能を果たすための棚田や棚地というものは、当然復活するでしょう。その棚田や棚地が、農村の暮らしを支えていく手段として年月を経ることにより、再び同じような景観が作り上げられると信じています。そうなるためにも、今はただ早く村に帰り、元の暮らしを取り戻したいと願って

います」

戦後、全国の中山間地から若者を中心に都会に出てしまう傾向が強くなったことによって、「ふる里」が自信と誇りを失くしつつあるような気がします。生産効率は悪い、農業だけでは生活できない、足の便が悪い……。そう言われてしまうと、「ふる里」から発信することができなくなります。山古志の人々は、地震によって「ふる里」を離れざるをえなくなりました。そのときあらためて、「ふる里」で暮らすことの大切さと意義を実感したのだと思います。便利ではありません。でも、伝統と文化を大切に守っている…。家族や地域が支えあって生きている…。「ふる里」は住むだけの場所ではないのです。その場所に暮らすことが生活のすべて、自分自身の生きざまのすべてだと思い知ったのです。そして、「私たちは、実は山古志が大好きだったのだ」と。この地に誇りを持って暮らすことが、全国の皆様へ感謝の気持ちをお伝えすることになるのだと。牛や錦鯉が家族の一員だと思って暮らしています。温かい、心の通じ合う「ふる里」でありたい、そう願っています。

私の田んぼも畑も、すべて被災しました。でも、今ではおかげさまで家も建て直すことができ、田んぼも畑も復旧しました。何よりも、家族皆が山古志へ帰ることができました。嬉しいことに、孫という新たな家族も増えました。そして、今年久しぶりに田んぼに入って稲刈りをするのができ、気持ちのよい汗をかきました。黄金色の稲穂が、田んぼで待っていてくれました。家族総出の稲刈り…。本当に久しぶりでした。楽な作業ではないけれど、家族全員でできる幸せをかみしめました。私の身体も農作業を忘れていませんでした。カマで稲を刈って束ねる…。いつもしていた当たり前のことです。嬉しくなりました。一息いれようと棚田の畦道に腰を掛けると、眼前にはススキの穂が揺れる「ふる里」の風景が広がっていました。待ち望んでいた農村の風景です。以前とは少し変わったけれど、立派な農村の風景が戻っていました。また百姓として暮らしてい



新潟県長岡市山古志竹沢

ける…。そんなに豊かではないかもしれないけれど、この地に暮らすかぎり、この地はふる里であり続けると思っています。稲架木に掛けた稲も、乾燥が済み脱穀することができました。まもなく「米」になります。自然の恵みに感謝し、流した汗に感謝し、この美味しさに感謝し、存分に味わいたいと思います。

人々が中山間地で暮らすことがなくなったら、ふる里の景観だけでなく、その機能も失ってしまうでしょう。山が荒れ、川が荒れたら、その地に暮らす人だけでなく、日本人のふる里を求め、ふる里を愛する心も失ってしまうかもしれません。だから、ふる里を守りゆく中山間地の人々の心をわかって欲しいと願っています。

棚田学会の皆様は、私たちのこのような気持ちを深く理解して、全国に発信してくださっています。私たちは、それに報いるためにも「ふる里」を守っていかねばならないと思います。

「東北アジア棚田シンポジウム&写真展」 参加報告

東京都府中市 今井 英輔

2009年7月23日(木)、韓国・慶尚北道で「東北アジア棚田シンポジウム&写真展」が開催されました。韓国、中国、日本の3カ国が参加しました。日本からは棚田学会会長の中島峰広先生、宇都宮大学の水谷正一先生、安井一臣理事と私の4名が参加しました。

韓国では、金泰坤博士(Kim Tae-Gon 韓国農村経済研究院)が韓国の棚田の衰退を防ぎ、棚田保全を目的とした「棚田研究会」を昨年設立し、活動を開始しました。

1. シンポジウム

韓国の研究者、行政機関、耕作者が約70名参加し、多くの活発な質疑応答がありました。予定時刻を40分もオーバーするなど、たいへん盛り上がりました。中島会長からは、「日本における棚田の現状と保全」、中国・雲南省の張紅榛(Zhang Hongzhenn、中国紅河ハニ棚田保全協会会長)さんが、3,000kmの旅の疲れも見せず、民族衣装で「中国紅河ハニ棚田の現状及びその価値」、韓国の李寅照博士(Yi, In-Hee、忠南発展研究院)からは、「韓国の棚田の利用状況と保全実態」について、それぞれ報告がありました。

シンポジウムの最後に、パネルディスカッションが行われ、宇都宮大学の水谷先生は「棚田の生態学的価値」、「棚田保全の制度」、中島先生から「棚田保

全活動」、「棚田の地域活性化」について、日本の事例を具体的に報告、慶尚南道の棚田で耕作しているLee Chang Namさんが、「南海の棚田の保全活動」の報告をしました。

そして、東北アジアの棚田の保全のため、今後、韓国・中国・日本の参加国の連携を確認しました。

2. 写真展

韓国、中国、日本の棚田を80枚の写真で紹介しま



パネルディスカッションの様子

した。日本からは30数点の出品でした。韓国では、棚田は一般市民にはあまり知られていません。会場に訪れた人々は、次々と感嘆の声を上げていました。「これが棚田?!」「日本の棚田は美しい!」「中国・雲南省の棚田はすご〜い」などなど。

中国・雲南省の張紅榛さんからは、「中国でも棚田の展示会を開催したいので、是非、韓国・日本の棚田の写真が欲しい。」との話があり、展示された写真は中国へ送ることになりました。棚田の写真が、韓国・中国・日本の友好と交流に役立つこととなって、嬉しい限りです。

3. 現地見学会

韓国・慶尚北道・蔚珍郡の温井面農協を訪れ、親環境農業実施を見学しました。この地方では、1998年度から有機農業に取り組んでいて、米ぬかを堆肥化し、畜産農家では米ぬかを牛の飼料として使う、また米ぬかと牛糞を混ぜて田んぼの肥料として利用するなど循環型の農法に取り組んでいます。その効果はてきめんで、土を元気に蘇らせ、強く健康な稲を育てています。そして、ここで収穫されたお米はブランド米として販売されています。

最後になりますが、この催しを準備して下さった「韓国棚田研究会」の皆様にご心からお礼を申し上げたいと思います。ほんとにご苦労さまでした。そして、ありがとうございました。

「第15回全国棚田(千枚田)サミット」 参加報告

神奈川県横浜市 萩野 宏樹

棚田サミット開催地の十日町市松代は、旧安塚町の棚田を訪れたときに電車で通過したことはあったが、地を踏みしめるのは今回が初めてである。開会式の前にまつだいの散策をしようと早めの時刻に駅に着いた。道の駅「まつだいふるさと会館」に入ると早速、参加者の一人である大学院生の方から棚田保全に関するアンケートへの回答記入の依頼を受けた。聞けば研究テーマにしているので協力して欲しいとのこと。解決策等を求められて考え込んでしまう。環境問題の場合と同様に答えがある程度はわかっているとしても、その実現のために限られた時間の中で、個々人の行動をどのようにして考えていってもらえばいいのか。まずは自らの行動で示すことから始めなければと思う。

この建物の二階では地元の棚田の写真展が催されていて、四季の素晴らしい景観にただただ見とれるばかりである。代々受け継いできた知恵と汗の結晶だから美しいのだと思う。

線路の反対側に渡ると市内池尻から解体・移築された入母屋造りの農家を利用したまつだい郷土資料館がある。管理人夫妻から地元産野菜の漬け物などをいただきながら、この建物でのかつての暮らしぶりなどのお話を伺った。太くて長い梁や柱など美事なケヤキ材を贅沢に使った建物に見入った。隣接のまつだい「能舞台」の屋上からは、棚田を舞台に農耕する人たちをかたどった野外作品が眺められた。これは大地の芸術祭のアート作品の一つで、この里山地区のあちこちに様々な作品が見られ、それぞれの景観にマッチしていて良かった。

午後から棚田サミット初日が始まり、開会式に続いて基調講演「中山間地域の農業構造改革」と題して、酒井富夫氏の新たな視点からの提言があった。経済優先の考えだけではわが国はもはや立ち行かない、発想の転換があらゆる政策に求められていると感じた。その後、いくつかの班に分かれての棚田見学会となり、蒲生・星峠・儀明の各棚田を巡った。水を張った棚田は格別美しく、また蒲生付近のブナ林、はるか下方まで続く星峠の棚田と遠景の山並みや儀明の棚田の対の桜など、見所は多彩であった。また、地元のボランティアの方々の接待や学生の演出など、誠にありがたい限りであった。

当日の宿は「まつだい芝峠温泉 雲海」だ。同室

の石塚氏から棚田サミットを創設した経緯などをお聴きする。所属の劇団で作・演出を担当する同氏は、棚田を様々な角度から取り上げて問題提起をしている。棚田学会の創設や三越本店で以前開催された棚田展などにも深く関わり、氏の棚田に寄せる熱い思いがお話の節々から小生の胸に強く伝わった。朝早くホテルの露天風呂に浸かり朝日が出るのを待ったが、残念なことに曇天の中から東の空が少しばかり朱色に染まっただけだった。そして眼下に見える棚田に霧がわずかに立ち込めただけで、雲海とはとても言えそうになかったが、それはそれで良しと思う。

二日目、棚田オーナーである小生は第二分科会の「みんなで支える棚田の農業」に参加した。星峠の地域でも耕作放棄地が拡がり、ボランティアがかるうじて支えている状態とか。既にもう待たなしの深刻な状況に陥っているのである。だが、棚田の将来を悲観するのはまだ早い。小生の考えでは棚田を守ることへの国民多数の理解が得られる時期が必ず来ると思う。大切なことは、そのときまであらゆる政策等を駆使して、何とでも今の棚田を維持することだ。幸い食糧自給率アップや健康・安全性の確保など国民の食への関心は確実に増してきている。食育の重要性を学校教育の場で、また若い世代に浸透させていくことが肝要である。継続は力なりという。あらゆる機会を捉えて働きかけていこう。



閉会式の様子



棚田見学会の様子

日本の棚田百選紹介

富山県氷見市の「長坂(ながさか)」

富山県氷見市長坂区長 木和田 勝

富山県氷見市は、能登半島の付け根付近に位置し、東に富山湾を臨み、海岸線から放射状に石川県県境まで低い山が幾重にも重なりあって広がっている。平野は狭く、海岸、山並み、里山に集落が集まり、その多くは中山間地域にあたる。

平成 11 年に「日本の棚田百選」に選ばれた棚田のある長坂地区は、氷見市街地から北東部へ約 17km、石川県との県境にある。氷見市街から七尾方面へ海沿いの道を走る。小境海岸を過ぎ、大境の峠を越えれば姿地区。富山湾に浮かぶ「虹が島」がすぐ近くに見える。JA 氷見市女良支所で左折すれば、すぐに谷間の道となり、所々に長坂棚田オーナー田の看板があり、道標となる。約 3km 位で長坂集落。集落上部の広い舗装された農道を上がって行くと、急に視界が開ける。長坂の棚田（標高 200m）である。山肌へはばりつく様に緩斜面を切り開いて作られ、昭和 55 年から 5 年かけて基盤整備をした田なので、他の地区の棚田に比べると少しイメージが違うかも知れない。しかし、地元の管理は丁寧で田は美しく、風景に実在感がある。多大な人力がかけられ、ゆっくりと年月をかけて出来た風景だからだろうか。晴れて空気が澄んでいれば、富山湾越しに立山連峰を仰ぐことができる。



長坂の棚田

「氷見市の棚田オーナー制度」は、毎年 5 月の第 4 土曜日は田植え、9 月の第 4 土曜日は、長坂の棚田で手作業の稲刈りをしている。平成 21 年は、「棚田オーナー制度」の発足から 11 年目となった。今年もオーナー 41 組が参加（250 人）し、そのおよそ半分は東京や大阪等の県外の人達。地元女良小学校の児童達が、米作りの学習発表と獅子舞を披露し、稲

刈が始まった。地元の農家や子供達、市役所や農協職員も参加して、総勢 350 人程の大人数での稲刈である。外国人の男女も、慣れない手つきながら一生懸命に、稲を鎌で 3、4 株を刈り取り、藁で結び束ねていた。丸太と竹で組んだ 10 段もある稲架に束ねた稲を架ける「はさがけ」を、子供達も梯子に登って手伝っていた。

長坂集落は 54 戸、うち農家は約半数で、村民の平均年齢が 70 才。農家の高齢化、過疎化が進んでいる地区だ。平成 11 年に、耕作放棄をなんとか減らせないと、富山県で初めての「棚田オーナー制度」をスタートさせた。棚田の景観、環境保全や観光資源としての活用、そして都市住民との交流を図ることによって、地域の活性化を目指したものである。

棚田の果たす役割は、①生産性は低いかもしれないが、昼夜の温度差が大きく、上質の米ができる、②棚田は人間が作った自然のダムとして、洪水や土砂災害を防ぐ、③水資源の確保。棚田に溜まった雨水や農業用水が地下に浸透し、地下水や豊かな川の流れを育む、④景観の保護。棚田が守り伝えてきた自然の美しさは、自然環境や生態系と調和する日本の原風景といえる、⑤水と緑に恵まれた農村環境の特性を活かし、自然との触れ合いの場を提供するとし、これを基本に、「棚田オーナー制度」の実施にとりかかった。

「棚田オーナー制度」の概要は、氷見市が農家から農地を 5 年間借り受け、これをオーナー会員に貸す。会員は約 40 組。総勢 200 名程度とし、募集をする。一区画は約 100 m²（30 坪）とし、料金は 3 万円。会員は 5 月に田植え、9 月には稲刈り、はさがけ等の農作業を体験し、さらに収穫した米（玄米 40kg）に農業特産品をセットにして受け取ることができる。そして、会員は、通常の管理を地元農家「椿衆」（実践指導班）に委託している。

棚田米は、「日当たりが良く、水も良く、土は粘土質で田んぼは深いから、もちもちして米の味が良い」と「棚田のうまいもん」、として好評である。農薬の使用は、通常の 1/4 の有機減農薬、自然乾燥のはさがけ米だからであろう。また、長坂の棚田には、石動山（標高 565m）からの水が、富山県側では最初の田に清らかなまま運ばれ、おいしい米作りに一役も二役も買っている。

石動山は、加賀、能登、越中の山岳信仰の拠点として栄えた国指定の史跡で、麓の長坂では昔から崇められている山だ。氷見は平野が少なく、低い山地に囲まれ、その谷間に村々が形成されている。特に山間の緩斜面のある土地には溜池しかないのも、水は大切に使われてきた。一度田に水を張れば、8 月一杯水を溜めるような管理をしてきたのであるが、現在では機械化が進み、田の管理も変わってきている。今後、さらに高齢化・過疎化が進み、営農組合も作れない山間地の農家は、どのようになるのか大変心配です。

書籍紹介

森田 敏隆・著

『日本の名景—棚田』

発行所・光村推古書院(本体 1600 円+税)

A5 判 244 頁 ISBN 978-4-0546-5 C0061

千葉県千葉市 森 公 夫

書名に「日本の名景」と付けば、棚田でなくともまず手にしたくなることでしょう。表紙には、小気味よく三枚の写真が並べられ、それが内容のすばらしさを代表している。棚田好きならば、それらは丸山、広内、そして浜野浦と即座に叫ぶに違いない。発刊の主旨では、棚田の現状、農家の人々の努力、棚田の国土保全機能に触れ心のふるさつである風景を写真で伝えたいとしている。

写真は、一頁に一枚(一部複数)、計 134 個所の美しい棚田が収録され、それぞれに所在地、地勢、現状や付近の様子、更には規模(面積と枚数)や平均勾配まで記載されている。また、地図頁には、棚田名、位置、掲載頁が載っていて読みたい個所が見出し易く、その気配りがうれしい。

私は、同著者が 2001 年に発刊した「棚田百選」の写真集を手元におき、撮影行の参考にしてきた。新たに刊行された本書は、内容のほとんどがリニューアルされ、棚田を全景で捉えていて特徴が理解し易くなった。また印刷も明度彩度ともに控えめで、目にやさしく、癒しの風景に合致しているのが良い。それにしても、全国 134 個所の山間を巡る撮影、その困難を克服した行動力に敬意を表したい。

ところで、棚田にはいろいろな働きが備わっており、種々論じられているが、私のように写す者から見た魅力は、1. 構図の選択が多様に行えること 2. その場から得る安らぎ、畏敬の念であると考えている。その背後には、労働、忍耐、連帯、持続、食や生への帰着、そして感謝といった人の営みの根源があるからだろう。

掲載されている写真のなかで、私のお気に入りを持ち上げるならば、熊野市の丸山千枚田である。夕日に映える力強い曲線の田を前面に置き、背後に段状田、それを山並みが引き立てる構図となっているものである。写真好きの誰もが思うように、私も同じ一枚をいつか我が手にしたいと願っている。そして、いつの間にかこの新しい「撮影の友」に沢山の付箋が付いてしまうことであろう。

事務局ニュース

■談話会のご案内

10 周年特別企画「棚田が語る歴史と未来」

日 時 2009 年 12 月 12 日(土) 14:00 ~ 17:00

会 場 早稲田大学文学部 36 号館 681 教室

講 師 湯浅治久氏(市立市川歴史博物館学芸員)

松原誠司氏(芝浦工業大学柏中学高等学校教諭)

吉川國男氏(NPO 法人野外調査研究所 理事長)

参加費 500 円(資料代)

但し棚田学会員、学生は無料

懇親会 引き続き同会場で行います。会費 500 円

■棚田学会誌 11 号の原稿募集

棚田学会誌 11 号の原稿を募集しています。

投稿は、論文、事例研究、報告とし、原稿枚数は概ね次のとおりとします。

①論文 40(字)×20(行)×20(枚)(図表を含む)

②事例研究 40(字)×20(行)×10(枚)(図表を含む)

③報告 40(字)×20(行)×5(枚)以内

〆切は 4 月 15 日(論文は 3 月 15 日)です。

■棚田学会賞の公募並びに基金募集について

「石井進記念棚田学会賞」は、平成 16 年度より募集を開始し、今年の大賞で、5 回目の表彰を授与する運びとなりました。

初代会長の遺徳を偲び、棚田の保全に資する優れた業績を讃え、この 5 年間で 11 団体 3 個人の皆さんにこの名誉ある賞が贈られています。

平成 21 年度の公募を開始しました。

円滑な運営をはかるため、応募並びに受賞にかかる費用として棚田学会賞基金を募っております。

会員皆さまのご理解とご協力の程、宜しくお願い申し上げます。

■棚田学会通信 28 号の誤植について

棚田学会通信第 28 号 7 ページ「特別寄稿」の題目と執筆者に誤植がありましたのでご報告し、お詫言申し上げます。

誤：「耕作放棄地の再生・利用に向けて」、農林水

産省農村振興局農地資源課専門官 瀧川 拓哉

正：「上流は下流を思い下流は上流に感謝する思想

を国民運動に」、全国水源の里連絡協議会会長

綾部市長 四方八洲男

平成 21 年度活動計画及び収支予算

1. 棚田学会大会 1回（平成 21 年度大会：平成 21 年 7 月 18 日開催）
2. 理事会 7回（平成 21 年 7 月 16 日開催済み、臨時開催含む）
3. 研究会・談話会・見学会
4. 創立 10 周年記念事業（10 周年記念誌発行、棚田出前事業、他）
5. 棚田学会誌『日本の原風景・棚田』（第 11 号）
（棚田学会誌第 10 号：平成 20 年 7 月 18 日発行済み）
6. 棚田学会通信（第 29, 30, 31 号）
7. 棚田学会賞の応募及び選定

1) 一般会計

（平成 21 年 7 月 1 日～平成 22 年 6 月 30 日）

収入の部		支出の部	
事項	予算額	事項	予算額
会費収入	1,700,000	旅費	110,000
普通会員 350 名・年× 4,000 円	1,440,000	講師旅費	100,000
学生会員 10 名・年× 2,000 円	20,000	連絡旅費	10,000
賛助会員 15 名× 10,000 円		謝金	80,000
3 社× 30,000 円	240,000	印刷費	2,065,000
寄付（10 周年授業費）	500,000	会誌第 10 号 (B5、96 頁)	800,000
図書販売	1,350,000	10 周年記念誌	1,000,000
会誌	50,000	学会通信 55,000 円× 3 回	165,000
10 周年誌（650 冊× 2,000 円）	1,300,000	大会資料等	100,000
前年度繰越金	1,369,232	通信・郵送費	370,000
		会誌発送費（第 10 号、記念誌）	30,000
		学会通信発送費（3 回）	90,000
		郵送費	100,000
		通信費（電話、FAX、切手代等）	150,000
		ホームページ運行費	20,000
		会議費	150,000
		理事会、編集会議他	150,000
		会場設営費	800,000
		大会	250,000
		談話会	50,000
		事務局費	360,000
		人件費	360,000
		消耗品費	84,232
		予備費	1,430,000
合計	4,919,232	合計	4,919,232

2) 特別会計

収入の部		支出の部	
事項	予算額	事項	予算額
棚田学会賞基金募集予定	300,000	棚田学会賞	30,000
前年度繰越金	236,831	賞状、盾製作費	30,000
		旅費交通費	135,000
		次年度繰越金	371,831
合計	536,831	合計	586,881

編集後記

政権が変わり、かなりドラスチックな動きが出てきました。

今まで棚田地域に活用されていた「中山間地域等直接支払制度」は今後どのようになるのか？民主党が打ち出している「農家の戸別所得補償制度」は、棚田地区へどのような影響をもたらすのか、目が離せない状況です。どのような政策であれ、「本質」「理念」をしっかりと踏まえた制度改正・政策論であってほしいです。(E.I)